

分担研究報告書

「学童期の療育指導のあり方」

－軽度脳性マヒ児の学童期の心理的問題について－

分担研究者：小西行郎 福井医科大学小児科
協力研究者：広川律子 愛徳福社会 南大阪療育園（心理）

研究要旨：統合教育がすすむ中で、軽度の脳性マヒ児の場合、都市部では殆どが、普通校に在席している。しかし、教科学習や対人関係など種々の問題を生じ、本人はもとより、親や教師もその対応に苦慮しているのが現状である。本研究では、発達心理学の立場より、典型例を検討し、彼らの学童期の心理的問題について明らかにする事を目的にする。

A. 研究目的

軽度の脳性マヒ児の療育を考える場合、知的発達の遅れのみならず脳障害特有の学習～行動障害についての理解が必要である。痙直型では、空間認識～構成障害や対人関係面での問題を持ち、教科学習や友人関係など学校生活での不適応を来している場合も少なくない。他方、この問題は、近年の痙直型両マヒ児の出生数の増加からみても重要であり、また、近年、脳病理上明らかにされてきた脳室周囲白質軟化症との関連でも明らかにすべき点が多く含まれている。本研究では、本年度は典型的な6症例について検討を行う。

B. 方法と対象

普通小・中学校に在席する痙直型マヒ児について知的発達の「正常範囲」「境界」「軽度遅滞」の3群各々2名、計6名に発達検査と面接を行い、保護者との面談もおこなった（表1）。対象児は全員、筆者により乳児期より発達検査を実施しているケースである。

表1. 対象児と新版K式発達検査の結果

知的発達	対象児	新K式検査	DA	DQ
正常範囲	A (男・小5)	認知・適応	9:11	88
		言語・社会	11:11	106
	B (女・小6)	認知・適応	10:5	86
		言語・社会	11:3	93
境界級	C (男・小6)	認知・適応	5:9	52
		言語・社会	8:3	75
	D (女・中3)	認知・適応	6:5	44
		言語・社会	12:6	86
軽度遅滞	E (女・中2)	認知・適応	5:6	40
		言語・社会	7:4	55
	F (女・中2)	認知・適応	5:5	41
		言語・社会	7:5	57

C. 研究結果と考察

3群に共通しているのは「認知・適応」いわゆる動作性課題の困難さであり、学習障害児における空間認知～構成障害と同様の性格を有するものである。これらは脳性マヒ療育の領域では「知覚～運動障害」とよばれ、発達検査上では、動作性得点が言語性のそれに比して顕著に低いという結果を示す。上記の対象児の場合でも、教科では算数（計算、空間操作）、図工、地図や音符の理解が苦手という症状を呈し、遊びでも野球やトランプなど空間認識の必要なゲームの理解が困難との訴えがなされた。いじめでは、言葉によるもの、無視される、班活動の際に孤立させられる、修学旅行に参加できない、などであるが全員が何らかのいじめを経験している。心理的問題としては、場面緘黙、吃音が各1名、心身症、不登校各2名、心身症の内容は、不安、不眠、息苦しさである。また、知的障害との関係でみると、「正常群」の2人は算数の特定領域（面積、体積など）では苦勞をしているものの教科学習にさほど問題はなく、むしろ小1からの場面緘黙と吃音（A）、断続的な不登校と心身症（B）などの問題が深刻である。「境界群」では、知覚～運動障害が学習面全般に障害を及ぼし、加えて不登校、友人とのトラブル（C）、心身症、方向感覚悪く単独で外出不可能（D）など社会性に関わる問題がより顕著になってきている。「軽度群」では、教科全般にわたって学力不振を来しているが、計算や書字が不可能（E・F）といった知覚～運動障害特有の症状が一層深刻になる。しかし、この群の問題は自己の障害認識の不十分さによる社会的場面での不適応といえる。

D. 結論

痙直型両マヒ児は、知的レベルの如何にかかわらず空間認知～構成を基礎にした教科学習と社会場面において特有の障害を呈し、それらが種々の心理的問題を招いている。それに対してどのような配慮が普通小・中学校で必要であるのかを考えていく必要がある。

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究要旨:統合教育がすすむ中で、軽度の脳性マヒ児の場合、都市部では殆どが、普通校に在席している。しかし、教科学習や対人関係など種々の問題を生じ、本人はもとより、親や教師もその対応に苦慮しているのが現状である。本研究では、発達心理学の立場より、典型例を検討し、彼らの学童期の心理的問題について明らかにする事を目的にする。